

金賞 小学生の部

とっても小さな親切

浜松市立鵜江小学校 五年

小澤 響

不安そうな顔と目があった。その子は、小さな体で大きなラ

ンドセルを背負っていた。その子は、ぼくの家の近くのマンションに住む男の子だ。今にも泣きだしそうな顔で、マンションの前と、ぼくの家の前をうろうろしていた。「お家の人が家になくて、家に入れないんじゃないのかな。」とふとぼくは、思った。ぼくも昔そういう経験があったからだ。ぼくは家にいた母に、その男の子のことを相談した。母も心配になったようで母が話しかけようとしたが、とっさに、ぼくがやってみる、となぜか言葉が飛び出した。知らない人に話しかけることが苦手なぼくだ。本当に出来るのか。心ぞうがはげしく動き出して、手にあせがわっと出た。ぼくはきんちようしていないふりをして「だいじょうぶ？おうちにだれもいないの？」一しよに待って

いようか」出来るかぎりやさしく話しかけた。男の子は、不安そうな目でぼくを見てから、何も言わずに下を向いた。余計なことをしたのかな…。ぼくの心ぞうはさらに早くなった。しばらくして後ろから、男の子のお母さんが走ってきて男の子の名前を呼んだ。男の子の顔はぱっと明るくなった。「すみません、ありがとうございました。」男の子のお母さんがぼくにお礼を言うと、男の子もぺこりとおじぎをした。さっきの不安そうな顔はすっかり消えていた。ぼくの心ぞうも静かになっていた。ぼくは男の子とお母さんの後ろ姿を見ながら、二人が早く会えて良かったなと思った。

今回この作文を書き始める時、ぼくはとても時間がかかった。自分がした、「親切」をさがすのが大変だったからだ。親切な事なんて何もしていないなあと思いつながら、ようやくあの男の子の事を思い出した。そしてまだ今も、この体験が「親切」に当てはまるのか、まよいながら書いている。ぼくが男の子に声をかけていてもいなくても、多分お母さんと出会えていたはずだ。もし「親切」に当てはまったとしても、きっと「とっても小さな親切。」でも、今改めてふり返ると、ぼくにとっては「とっても大きな親切」だったと感じる。すごい事をした、という意味ではない。知らない人に話しかける事が苦手なぼくが、すぐく不安そうな男の子を助けてあげたいという思いで、勇気

を出せた事。そして、勇気を出した先には、あの男の子のホッとした顔が見れて、お母さんからお礼を言ってもらえた事。勇気を出さなければ、体験できなかった事だ。そしてその体験は、とてもあたたかい気持ちになることが出来る事を知れた。ぼくはこれからも、少しの勇気を持って、ぼくなりのとっても小さな親切を重ねて、あたたかい気持ちをたくさん体験していきたい。

思いやりいっぱい場所

浜松市立伊佐見小学校 六年

水野 瑛仁

『『そうた』じゃなくて『えいと』だよ。』

「おー『えいと』か、大きくなったなあ。」

最近、ぼくのおじいちゃんは、いつも、ぼくといこのお兄ちゃんを間違える。ぼくは、背も体重もどんどん大きくなっているし、お勉強もがんばっているつもりだけど、おじいちゃんの中のぼくは、今もこれからも、小さい子供のままだ。

最近のぼくのおじいちゃんは、忘れんぼうだ。いろいろわか

らないみたいで、どうしていいのかわからないみたいで、いつもさみしそうな顔をしている。ぼくを呼ぶ声も元気がない。夏休みの間、おじいちゃんは、何度もいなくなっていました。『仕事へ行ってくる!』

と言って、電動自転車で、出かけようとする。おばあちゃんも、いとこのお兄ちゃんも、必死で止める。ぼくもがんばる。

「じいじ、今日は、ぼくも学校がお休みでお家にいるよ。じいじもお仕事は、お休みだよ。」おじいちゃんの手を見て、立っているおじいちゃんの手をさわって、ゆっくりやさしく声をかける。お母さんに教えてもらった『ユマニチュード』をやってみる。でも、なかなか上手くできない、難しい。気づくと、おじいちゃんはいなくなっているし、帰ってこない。今度は、お父さんも加わって、みんなで探しに行く。ぼくは連絡係で、お留守番だ。やっと見つかって、家へ帰って来ると、みんなほつとする。でも、おじいちゃんは、まだどこかへ出かけてしまう。そしてまた、みんなで探す。おばあちゃんは、つかれてしまつて元気がない。

久しぶりに、おじいちゃんとお風呂に入った。ぼくが小さい時は、おじいちゃんがぼくの髪や体を洗ってくれた。今は、ぼくがおじいちゃんの背中を洗う番だ。そして、体をふいたり、着替えのお手伝いをする。おじいちゃんはニコニコとうれしそ



金賞

うだ。ぼくもうれしくなる。ニコニコ笑顔のおじいちゃんが、ぼくは大好きだ。

ぼくのお父さんとお母さんは、毎日仕事で帰りがおそい。ぼくは学校が終わると、おじいちゃんとおばあちゃんの家へ帰る。おばあちゃんを作る夕ご飯のいいにおいが大好き。学校の先生をしていたおじいちゃんは、お勉強が得意で、宿題をみてくれる。

「えいとは、書き取りの字がきれいなあ。」

「えいとは、計算が速いなあ。」

いつもニコニコ言ってくれた。学校でいやな事があった時も、お母さんにおこられて泣けた時も、ここへ来るとほっとする。笑顔になれるし、元気になれる。ぼくにとつてここは、思いやりいっぱい場所。これからは、ぼくががんばるぞ。おじいちゃんとたくさん一緒にいて、目を見て、手をつないで、たくさんお話ししよう。そして、思いやりいっぱいの場所をプレゼントする！おじいちゃんや、おじいちゃんみたいな人達が、これからもニコニコ笑顔で安心して暮らしていけるように。

相手を思うこと

浜松市立井伊谷小学校 六年

溝尻 真帆

「どうしよう。」

去年、母と買い物に出かけたスーパーで、出口から出た時に思ったことです。私は、思いやり駐車場で車いすに乗っているおばあさんとおじいさんを見かけました。二人は買った物を車に積み込むところでした。おじいさんは車いすから地面に降り、膝をついて、おばあさんの膝の上にある品物を車に移していました。車いすは特別に作られたもののようにでした。浅い段ボール箱一つでしたが、どうやって移すんだろう、移すのが大変そうだなと思いました。私は初めて見る光景で、声をかけてよいのか分からず、その場で立ち尽くしてしまいました。母も一緒に立ち止まり、その光景を見ていました。私達は、おじいさんが無事に荷物を移したのを見届けた後、車に戻りました。私はどうしたらよいのかわからず、また、母はどう感じていたのか知りたくて、母に聞きました。

「お母さん、あの時、どうしたらよかったの？私は助けたいと思ったけれど、声をかけられなかった。」

母は少し考えた後、こう言いました。

「そうだよ、お母さんも声をかけようかどうしようかなって思ったよ。今はコロナ禍で、人との接触を避ける人もいるし、何が親切なのか考えたよ。だからせめて荷物を運び終えるのを確認した。てきぱきとしていたし、あのおじいさんなりのやり方もあると思うから、もし落としそうになったら、声をかけたと思う。でもなんかモヤッとするよね。」

私はそれを聞いて、このモヤッとした気持ちはお母さんも一緒だとわかり、少し安心しました。また、相手の行動を立ち止まり見守る、そういう考えもあるのかと思いました。

初めて見る光景だったから声をかけられなかったの？赤ちゃん連れのお母さんだったら声をかけたの？どんな時でもやっぱりその人のためを思って声をかけてあげたほうがいいの？でも、逆にその人のためを思って声をかけないほうがいいの？それにそもそも荷物を運びましょうかと声をかけることでコロナに感染するの？駐車場という屋外で、マスクをし、そのあとは消毒をするだろう行動で。

色々考えて、このモヤッとした思いは声をかけられなかったことが理由の一つであり、もし立ち止まらなければ、もっとモ

ヤットしていただろうと気づきました。だから、親切や思いやりに正解なんてない？正解がないから悩むのだと思いました。いろいろな場面でのいろいろな回答がある、正解がないからこそ、いろいろな行動という回答があるのだと気づきました。自分の出した回答の行動に、相手が喜んでくれたらうれしい、だから、視野を広げること、正しい知識をもち、どうすべきかを考えて行動をしていきたいと思いました。



金賞 中学生の部

沢山の人が笑顔になれるように

静岡県立浜松西高等学校 中等部 一年

天野 心結

私は今、髪をのばしています。なぜなら、ヘアドネーションという活動に参加するためです。ヘアドネーションとは、小児がんや先天性の脱毛症、事故などで頭髪を失った十八歳未満の子供のために、寄付された髪の毛でウィッグを作り、無償で提供する活動です。私は、この活動を通して、親切は自分も相手も幸せな気持ちになれると実感しました。

小学校六年生のある日、いつものように学校へ通っていると、親友が髪の毛をバツサリと切ってきました。どうしたの?と聞くと、

「ヘアドネーションっていいね、髪がぬけてしまった子に寄付したんだ。私の髪は、とても健康的とはいえないけれど、困っている人に協力できるなら役に立ちたいな、と思ったの。」

と教えてくれました。私には、親友のその姿が、かっこよく輝いて見えました。それと同時に、私も、これならできるかもしれないと思いました。さっそく髪の毛を伸ばしましたが、髪が長いのはあついいし、乾かす時間もかかり、不便で正直大変でした。でも、私の少しの努力で、一人でも多く笑顔になってくれる子が増えるのなら、と思い乗り越えました。ある美容院で、寄付を行っていることを知り、私は髪を切ろうと決心しました。切り終え、フロントで待っていると、壁に沢山写真がはってあることに気がつきました。近づいてよく見てみると、それはヘアドネーションで寄付された髪で作ったウィッグをかぶった子供達、楽しそうに笑っている写真でした。私もこの子供たちの役に立てたのだなと思い、ながめていると、美容師さんが、「今日はありがとうね。きつと喜んでもらえるわ。本当に助かるよ。」

と云ってくださいました。心が温まって、嬉しい気持ちでいっぱいになりました。大きなことではないけれど、ちょっとした努力や思いやりで、誰かを笑顔にできて、感謝してもらえることは、幸せでした。

最近では、SNSなどで拡散され、多くの若い人達にも注目される活動となりました。ボランティア活動から人と人が結ばれて、社会に貢献されるようになったことは、とても良い

事だと感じます。「困っている子が笑顔になれるように」と思い、髪を伸ばす時に自宅ですっかりケアをして、髪を大切に育てる事ができました。少しの親切心から、多くの事を学び、人の温かさや、優しい気持ちに触れる事ができました。ヘアドネーションをはじめとする、小さな親切で一人でも多く、幸せになれる人を増やしていきたいです。

「バス停での出来事」

静岡大成中学校 三年

海野 七音

私には、人に親切にしようとして後悔した苦い経験があります。バス通学をしている私は、ある日学校に向かうバスの中で、七十代くらいの女性の近くの座席に座っていました。少し離れた座席がいくつか空いていましたが、私は自分の席が一番近かったので譲ろうと思い、立ち上がって「どうぞ!」と声をかけました。するとその女性は、「まだ私はあなたに席を譲ってもらうほど年寄りじゃないよ。」と言い、座ってくれませんでした。

今思うとその女性は、「別に座らなくても平気ですよ。」という意味で遠慮して言ったのかもしれませんが。でも、当時の私はとても恥ずかしくなり、席を譲ろうとした事をひどく後悔しました。

それ以来、私はバスで席を譲るような状況に出くわしても、なかなか声をかける事が出来ず、他の誰かが譲ってくれるのをただ待っていました。

それから一年程経った頃、私は帰宅する為にバスを待っていました。バス停には私の他にかなりお年を召した女性が並んでいましたが、もうすぐバスが来るという頃、その女性が何となく気分が悪そうに頭を下げていました。

私は勇気を出し「大丈夫ですか?」と聞くと、その女性は「ちよつと疲れてしまつて気分が悪いの。」と言いました。ほどなくして自分の待つていたバスが到着しましたが、私はそれを見送り、女性と一緒にベンチで座って休みました。バスが2回通り過ぎた頃に、その女性が「もう落ち着いたから大丈夫!親切にしてくれて本当にありがとう。あなたが居てくれて良かった。」とお礼を言ってくれました。何度も何度も振り返り、頭を下げて、その女性はバスに乗って行きました。私は決して特別な事をしたわけではありません。その場に居合わせた人間として、当たり前前の事をしただけだと思って



金賞

います。でも、あの女性は心から私に感謝してくれました。彼女の柔らかな笑顔と、自分の胸が爽やかに晴れ渡るような感覚を、今でも忘れる事が出来ません。そして、自分の胸に小さなトゲのように刺さっていたあのほろ苦い思い出も、今では不思議なくらいさっぱりと消えて無くなりました。

私達は、これから先色々な人に支えられ、また誰かを支えながら生きて行くでしょう。そんな中、自分が出来る事を見つけた時は、ちょっとだけ勇気を出して手を差し伸べられる人になりたいです。私をそんな気持ちにさせてくれたあの日の出来事は、これからもずっと大切にしたい思い出です。

思いやりによって守られる 健康な心と体

静岡市立豊田中学校 三年

鈴木 さくら

私の修学旅行は小さな思いやりによって、とても温かいものとなった。

私は重度のアレルギーをもっている。中でも、エビとカシューナッツは食べると嘔吐や呼吸困難となる、アナフィラキシーが

発症してしまうのだ。だから、出先の食事は気を付けなければならぬ。過去にお店でアレルギー症状がでて、そのまま病院行きということが何度もあった。特に修学旅行は、先生や旅行会社の方以外に大人がついていないから、いざとなったら友達に助けを求める可能性がある。しかし、それは本当に避けたいことだ。自分のせいで、友達の一生の思い出に泥を塗りたくない。そう思うととても責任を感じた。修学旅行前は万全な準備をした。いざとなったときの、錠剤、塗り薬、エビペン等は何度も確認した。しかし、やはり当日は不安だ。楽しい食事でも、ふと「もしもー。」と怖い過去がよぎることがある。

ホテルの食事でも席に着く前は不安だった。ホテルの食事はスタッフさんや料理人さんによるアレルギーの説明が多い。過去に「せっかく作ったのに。」や「時間ないのに。」といった表情で説明されることが何度かあった。確かにそう思うのは仕事をしていれば当たり前だと思うし、私もアレルギーをもっていないからそう感じていたかもしれない。しかし、何か悪いことをしてしまったような気持ちになる。今回もそのような表情をされると思い、身構えていたが、そんな必要は全くなかった。私の席に来たスタッフさんは、とても温かい笑顔で説明してくれた。ひとつひとつ丁寧な。こんなにも親切な説明は初めてだったので、最初はとても驚いた。しかし、ずっと笑顔で話し

てくれるスタッフさんの説明を聞いているうちに、自然と心が満足感と安心感で満たされていった。そのスタッフさんは食事中も異常がないか確認しにきてくれた。私は、ずっと笑顔で親切なのに、一切その笑顔や態度に「仕事だから」感を与えさせないことがとても不思議だった。それはなぜなのか、ホテルの部屋で考えていた。寝る直前に、以前読んだ「デイズニーおもてなしの神様が教えてくれたこと」という本の内容を思い出した。文中に「おもてなしとは裏表のない見返りを求めない気配り」と書かれた文章があった。あの時のスタッフさんと重なった。あのスタッフさんは金銭的報酬や成績を考えず、ただ私が安全に食べられるように気配りをしてくれたのだと思った。謎が解けたような爽快感と、スタッフさんの思いやりに改めて胸がいっぱいになった。「思いやりでこんなにも心と身体が健康に保たれるんだ。私もあのスタッフさんのような人になりたい。」そう思った。ベッドに入り、思いやりによつて健康が守られた身体でいっぱい息を吸い、眠りについた。おもてなしの、思いやりの神様が見てくれているような気がした。



銀賞 小学生の部

「やさしさのリレー」

浜松市立与進小学校 三年

河住 花

私は二年生の時にコロナになりました。コロナになった事をだれにも知られたくありませんでした。ホテルのせまいへやに十日間もいてとてもつらかったです。家族や友だちにも会えなくて、お出かけもできず、好きな食べ物も食べられませんでした。習い事のダンスとピアノ、学校にもすぐ行きたかったです。本当につらい十日間でした。だけどそんなつらい中でもうれしい事もありました。友だちやいとこなど色々な人からはげましの手紙や電話、おかしやおもちゃなどがとどき、たくさんのやさしさをももらいました。ホテルのスタッフさんは朝、昼、夜のごはんを作ってとどけてくれました。かんごしさんは、毎日体調チェックをしてくださいました。お母さんは、毎日いっしょにいてサポートしてくれました。学校の先生もしゆく題をとどけてくれたり、はげましの電話をく

れました。いっしょにコロナになった友だちとは、毎日テレビ電話をしてはげまし合って心をささえ合いました。コロナになってとてもつらい事もたくさんあったけれど、私のまわりにはこんなにたくさんやさしい人がいる事に気づいてうれしい気持ちになりました。

人にやさしくされると心がうれしくなります。そうすると自分も人にやさしさをお返ししたくなります。これは「やさしさのリレー」だと思います。私はいつも、だれかに助けてもらって生きています。今では自分がこまっている人を助けたいです。まずは小さな事からはじめます。だれかが物を落としたら、すぐに拾ってあげます。まわりの人がつらい事や悲しい事があったら、はげましてあげます。一人ぼっちの子がいたら、自分から声をかけてなかまに入れてあげます。いつも笑顔で友達たちにやさしくします。自分がされてうれしい事は、人にもやる。自分がされていやな事は、人にはしない。この気持ちを大切に、これからはずいいていきたいです。

私のまわりでだれかがコロナになったら、私は手紙を書いてやさしい気持ちをとどけて、はげましてあげたいです。コロナはみんな、なりたくてなっているわけではありません。おたがいせめずにはげまし合って、思いやりの気持ちを持ってこのコロナをみんなでのりこえたいです。そして、遠くに住むいとこに会ったり、

コロナを気にせずに色々な所へお出かけしたり、マスクをはずしてすごしたり、昔のような生活に早くもどってほしいです。

雨の日のこと

浜松市立豊岡小学校 二年

窪野 柚月

七月六日、学校からかえるとちゅうでかみなりがなって雨がいきなりふってきました。わたしはかみなりの音がこわくて立ちどまってないてしまいました。そうしたら通りかかった五年生のお姉さん二人が、

「どうしたの？」

とこえをかけてくれました。なっているわけを話すと、ひどい雨の中をいっしょにおうちまでかえってくれました。

一人でかえるのはふあんだったので、とても心づよかったです。

夕方、しごとからかえってきたおかあさんにお姉さんたちのことを話すと、

「とてもすてきなお姉さんたちだね。たすけてもらえてよかった」

たね。」

と言っていました。

わたしは、お姉さんたちにしん切にしてもらってとてもうれしかったです。そんなやさしいお姉さんたちがいるとよおか小学校に通えてよかったなと思いました。

人にしん切にもらうとても心があたたかくなってうれしくなります。もしわたしより小さい子がこまっていたり、ないていたら、わたしもたすけてあげられるようなすてきなお姉さんになりたいです。



銀賞

「親切は勇氣」

浜松市立有玉小学校 六年

高林 李羽

「親切」って何だろう？辞書には、思いやりが深く好意を持って人のためにあれこれとり計らってやる事と書いてあったけれど、私は、その通りではないと思う。母は、親切が難しいと言っている。私も難しいと感じる。なぜならば、人によっては、手伝って良いかの意見がちがうからだ。

去年、私は、親切を受けた。名古屋からの旅行の帰り道。電車の中でお兄さん達が、席をゆずってくれた。

なぜ、親切にもらったかを考えた。

・母が妹をだっこしていて、大変そうだったから。

・私を入れて、小さな子どもが三人いたから。

・大きな荷物を持っていたから。

・電車は、人で混んでいたから、と、考えた。

もし、親切が受けられなかったら、大変な思いをして家まで帰っていたと思う。

席をゆずってもらって、世の中には、優しい人達がいつ

ばいいな、うれしいな、幸せだな、と思った。心が、あたたかい気持ちになった。

私は、あの時の親切は、ぜったいに忘れない。これからは、自分が少しでも迷っている人、困っている人達を助けてあげたい。

母は、助ける前に一言、

「お手伝いしましょうか。」と聞いているらしい。私も母のように一言聞いて、お手伝いが必要であれば、助けてあげるようにしたい。

親切は難しいけれど、相手にも喜んでもらえると思う。自分も手伝って良かったなと思えるから、大切な事だと思う。

これから、挑戦していきたい事は、私は、一言を言うのに「勇氣」が必要だから、頑張って勇氣を一步踏み出して、自分から声をかけていきたい。

銀賞 中学生の部

親切は「ありがとう。」のため？

静岡県立浜松西高等学校 中部部 二年

右藤 結衣子

私は、登下校中のバスの中で小さな親切に出会った。

私がバスに乗っていると、次のバス停に杖をついたおばあさんが立っているのが見えた。すると、私の前に座っていた男の人がバス停に着く前に席を立った。バス停に着いたが、男の人はバスから降りず、乗ってきたおばあさんは、空いた席に座った。

男の人は次のバス停におばあさんがいることに気がついて、席を譲ったのだと思う。この男の人が本当に席を譲ろうとしたのかは分からないが、相手に余計な気遣いをさせずに席を譲るために、このような行動をとったのではないかと考えた。私は、以前、席を譲ったとき、その人に大丈夫だと断られてしまったことがある。その後、どうして

いかわからず困ってしまった。今回、この男の人の行動を見て、このような譲り方もあるのだと、気づかされた。

私は、今まで感謝されてこそその親切だと思っていた。しかし、この男の人の行動は間違いなく親切だと思った。このことから、私は感謝されなくても誰かのことを思って、誰かのためにすることは全て親切だと思う。そしてこの行動は、周りが見えているからこそできたことだろう。次のバス停におばあさんがいることに気づかなければ、他に空いている席がないことに気づかなければできないと思う。自然にこのような行動ができるのは、かっこいいし、憧れる。

この男の人は、感謝してもらうためではなく、おばあさんが座ることができればいいと思える心の優しい温かな人だと思った。また、この親切は周りに気づかれる可能性が低い。席を譲ってもらったおばあさんが気づかないのだから、他の人はほとんど気づいていないと思う。しかし、それを親切として見ていた人もいるだろう。この親切を一人でも多くの人が見ていて、その誰かが男の人に習って同じような行動をすれば、親切の輪は広がるはずだ。

私はこの行動を見た後、自分にもできることはないか考え、行動に移した。それはバスの中なるべく後ろの席に座ることだ。バスは、入り口から後ろの方の席に行くまで



銀賞

に段差があるため、足腰の弱い高齢の方や目の見えない人は前の席のほうが座りやすい。そのため、私はバスに乗るときには、できるだけ後ろの席に座ることを意識している。実際に行動して、感謝されなくてもバスに乗った人が少しでも安心して席に座ることができれば、それでいいと思えた。

私は、これからもたくさんの人に出会う。その時、その出会いの分だけの親切に気づくことができたなら、他の人にその分返すことができると思う。これから、周りの親切を吸収して自分のものにしていきたい。

親切のバトン

牧之原市立相良中学校 二年

齊藤 朱里

夏休みに入り、母と久しぶりに電車に乗って祖母の墓参りに出掛けました。電車は、遅めの通勤時間ということもあり、それなりに満席でした。自宅の最寄駅から私達は運よく空いた席に座っていました。そこから、三つ程駅を乗り継いだ時、

大きなお腹の妊婦さんと年少さん位の元気な男の子が乗ってきました。車内を見渡す限り空席はなく、妊婦の母親は子供に自分の手をしっかりつかんでいるようにと、言いきかせていました。母は私に指で席を代わろうと合図を送ってきて、私たちは二人に席をすすめました。妊婦さんは最初遠慮していましたが、母が「私も妊婦さんの時ゆずってもらったから。」と伝えると、笑顔で「ありがとうございます。」とお礼を言つて男の子と座りました。その後、何回か電車が激しくゆれる地点があつたので、ゆずってあげて良かったなと温かい気持ちになれました。

電車を降りた後で、私は母に席をゆずってもらった時の話をきかせてほしいとしました。私がお腹にまだいた頃、母も同じように四才の兄を連れて電車に乗ったが空いている席がなかったそうで、荷物と兄と自分の体と大変な状況のときに席をゆずってもらったそうです。その時、人に甘える事が苦手な母でしたが、少し強引なくらいの人のよさそうなおばさんに無理せず座るようにすすめられたそうです。それからとても楽になってすぐ助かったし、明るいおばさんとお会えて楽しかったと教えてくれました。電車に乗って自分と同じような状況の妊婦さんを見たら、自分が受けた親切を思い出して、あのような行動をしたと言っていました。もし私が

一人で遭遇したら、断られた時の事を考えると、私にはできないと思います。実際、私たちが席をゆずった妊婦さんも、最初遠慮して断ってきました。そう考えるとできないと話すと母は、「私がそうだったように、さっきの妊婦さんも子供が大きくなったら同じような場面で同じような対応をしてあげたくなるんじゃないかな。私は本当にあの時助かったから自信を持って行動できたよ。」と言いました。それを聞いて私は、まるでリレーのようだと思います。親切をされた人がバトンを受け取って次の人へ。そうやって親切はつながっていくのかなと思いました。親切にしてあげた相手に何か見返りを求めることはなく、親切にされた側も、最初は遠慮してしまうかもしれませんが、それが喜びに変わって、その体験が他の人に親切な行為をすることにつながりその親切をまた別の人へ受け渡すというのは素敵な事だと思います。他人を思いやる気持ちから生まれた行動が世界中へ親切のバトンとなって広がっていったら世の中ももっと笑顔があふれると思いました。私もいつか親切のバトンを受け取った時には、感謝の気持ちを忘れず、そのバトンを渡そうと思います。

つなげたい親切

静岡県立浜松西高等学校 中部部 二年

森田 瑞稀

「あっそこ、あの人がいつも座っている席なのに。」

私が毎朝通学しているバスには白杖を持った視覚障がい者の男性が乗ってくる。その人は毎日ドアから一番近い優先席に座っている。ある日、私はいつも通りバスに乗っていると、いつもはあまり乗らない女性がドアに一番近い優先席に座ったのだ。私ははっとした。その席にはあの人が座るのに、と心の中で思っていたが言葉に出すこともできず、はらはらしながら見ていた。そして、その人がバスに乗り、いつものように誰かが座っていないか、背もたれの端を触った。何か感触があったのだろう。お互いはっとした表情になった。そして座っていた女性には慌てた様子で席を立ち上がり、その男性に席を譲っていた。私はその女性の行動を見て、自分だったらどうしただろう、と考えた。あの女性のようにすぐに席を立ち、譲ることができたのだろうか。そう考えていると不安な気持ちが押し寄せてきた。その後、私は改めて思った。「親切」というのはどのようなこ



銀賞

となのだろう。私の生活の中で身近にできる親切とは、バスや電車でお年寄りや妊婦さんに席を譲ったり、落とし物を拾って持ち主を探したりと、おもしろいやりを持ち、困っている人を助けることだと思っている。しかし、それを実行しているかと聞かれると答えはノーだ。もし断られたら、もうすぐ授業が始まるから、と何かと理由をつけて見て見ぬふりをしてしまう。そんな事を一日中考えていた。

さらに感動したのは、その次の日からの女性のおもしろいやりのある行動だ。女性はまだその男性が毎日同じバスに乗ってくる事を知らない。それなのに女性は、座る席を変えたのだ。まだ分からない可能性を予測して、あの男性がいつもの席に座れるように。本当にそうかどうかは分からないが、私はそれを見て心があたたかくなった。

「おもしろいやり」と辞書で調べてみると「その人の気持ちになつて、親切に考えること」と書かれている。あの女性は、男性の気持ちを考え、そのような行動をとったのだろう。そして私は思った。親切とは、した人もされた人もその行動を見ていた人も、全員がいい気持ちになることができるワクチンのようなものなのだ、と。

私は、この出来事を通して、今までは気づかなかった、おもしろいやりが身近な所にもたくさんあふれていることを知った。こ

のように、色々な角度から、相手の気持ちを察して考え、行動することがどれほど素晴らしいか、一人一人がそのことに気づくことができれば、毎日の生活があたたかくなり、より良い未来が待っているのではないだろうか。

